

マイケル・ウォルツァー著「寛容について」みすず書房 2003年12月19日刊を読む

寛容とは(On Toleration トラレーション)

1. わたしはアメリカのユダヤ人として自分が寛容(Toleration トラレーション)の対象であると思いつながりながら成長した。わたし自身、寛容にふるまうべき主体でもあるとわかったのはずっとあとになってのことだ。アメリカ合州国という国は、みな自分が以外の人すべてにたいし、寛容をもって接しなければならないところだとわたしは少しずつわかってきたのだが、そうした理解こそ、この試論の出発点だった。 P9

2. 寛容をもって接することと、寛容をもって接せられることはアリストテレス(政治学)のいう支配することと支配されることにいくぶん似ている。つまりこれは民主的な市民の仕事である。 P10

3. いったい何が寛容を支えるのか、寛容はどのようににはたらくのか。

寛容は生(life、ライフ)そのものを支える。なぜなら迫害(persecution パーセキューション)はおうおうにして死を招くのだから。

さらに、寛容は共同の生(common lives、コモン・ライブス)つまりわたしたちが生きているさまざまに異なる共同体を支える。

寛容は差異を可能にし、差異は寛容を必要不可能なものにする。 P10

4. わたしの主題は寛容である。もうすこしうまくいえば、たがいに異なる歴史・文化・アイデンティティをもつ人々の集団の平和的共存である。これこそが寛容が可能にしてくれるものである。

まずは平和的共存はいつもよいものだという命題からはじめよう。平和的共存の価値やこの共存が助けとなってもたらず生命と自由(リバティー)の価値を是認することなしには、自分たち自身もしくは他の人びとにたいして自己正当化することはできないのだ。これは道徳世界に関する一個の真実なのだ。 P13 ~ 14

[コメント]

キー・コンピテンシーの1つである「自律的に活動する能力」を身につける上で、「寛容」についての「理解」は欠かせない。どう「理解」し、「定着(身につける)」させ、「応用(日々の生活にしみこます)」するか、社会だけでなく1人の人間としての課題となる。

- 2009年1月16日林明夫記 -